

# 狛江古墳群 I

平成10年3月20日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話(3430)1111

## I 狛江古墳群とその時代

古墳は、3世紀末から8世紀初頭ごろに造営された、古代の豪族たちの墳墓であり、その権威のシンボルでもあったと考えられるものです。また、この時代はわが国が統一国家成立へと進んで行く、日本史の流れの中でも画期的な時代にあたります。ところがこの時代は、まだ文字による記録がほとんど認められません。ですから古墳は、当時の文化や社会のようすを知る、貴重な歴史的資料でもあるわけです。

このような古墳は狛江市内でも認められ、かつては70基前後が群集し、多摩川流域でも有数の、狛江古墳群を形成していたと考えられます。現在残っているのは13基ほどですが、本来その分布範囲は、市内南半部の立川段丘上一帯におよび、旧野川と旧清水川によって、岩戸支群・和泉支群・猪方支群の3つのグループに大別することができるようです。

## II 狛江古墳群の調査

狛江古墳群については、すでに江戸時代の文献に、20基以上の古墳の記載がみられますが、本格的な調査が行われるようになるのは、昭和26・28年の亀塚古墳の発掘調査からです。この調査で亀塚古墳は、5世紀末から6世紀初頭の全長40m、高さ6.9mの帆立貝形古墳であることが判明し、検出された3つの埋葬施設（遺骸や副葬品をおさめた施設）からは、鏡・装飾品・武器・馬具などの豪華な副葬品が多量に出土しました。なかでも鏡は「神人歌舞画像鏡」とよばれる特殊なもので、同種の鏡が渡来系氏族の集住地とされる地域の古墳からも出土していることが知られ、また、「金銅製毛彫金具」とよばれる装飾品は、朝鮮半島の古墳壁画に似た、人物・龍・キリンの画像が彫刻されているものであることが指摘され、亀塚古墳の被葬者を渡来人と考える学説が提示されることとなりました。

その後も狛江古墳群については、昭和35年（第1回）と昭和51・52年（第2回）の2度にわたる古墳分布調査や、昭和36年の絹山塚古墳の発掘調査、昭和51年の白井塚古墳の発掘調査、昭和62年の東塚古墳・兜塚古墳の周溝発掘調査、昭和62・63年の弁財天池1～3号墳の発掘調査、平成元～5年の古屋敷塚古墳・（仮称）東和泉1～9号墳の発掘調査や、この間の久保前原古墳・橋北塚古墳・前原塚古墳・駄倉塚古墳の周溝発掘調査、平成8・9年の経塚古墳の周溝発掘調査等が行われました。

このような調査のなかでも、昭和62年以降のものには注目されるものが多くあります。弁財天池1～3号墳の調査では、3基の円墳（1号墳＝直径23m・2号墳＝直径13.5m・3号墳＝直径18m）が発見され、いずれも墳丘や埋葬施設はすでに失われていましたが、1号墳の周溝（古墳の周囲に掘り廻らされた溝）内からは土師器・須恵器・鉄剣等が出土し、狛江古墳群中で最も古い5世紀前半の古墳であることが判明しました。

東塚古墳の調査では、周溝部分のみの調査でしたが、直径35mの墳丘に幅9mの周溝が廻ることが確認されました。また、周溝内から出土した円筒埴輪片は、それまで狛江古墳群中最古のものとされていた亀塚古墳のものより古い、5世紀後半に比定されることが判明しました。

兜塚古墳の調査も、周溝部分のみの調査でしたが、直径38mの墳丘に幅11mの周溝が廻ることが確認されました。また、周溝内から出土した円筒埴輪片は、6世紀中頃に比定されることが判明しました。

前原塚古墳の調査では、周溝の発掘によって、直径23.5mの6世紀前半頃の円墳であることが確認されました。また、調査と並行して行った地中レーダー探査によって、それまで考えられていた横穴式石室を埋葬施設とする古墳（6世紀後半以降に出現）の可能性が否定されました。

古屋敷塚古墳は、墳丘はすでに失われていたため、周溝部分のみの調査でしたが、直径39.2mの5世紀中頃の円墳であったことが確認されました。

（仮称）東和泉1～9号墳も、墳丘はすでに失われていましたが、その多くが直径8～15mクラスの、5世紀後半から6世紀前半頃に比定される、小型円墳であることが判明しました。

### Ⅲ 狛江古墳群の特徴

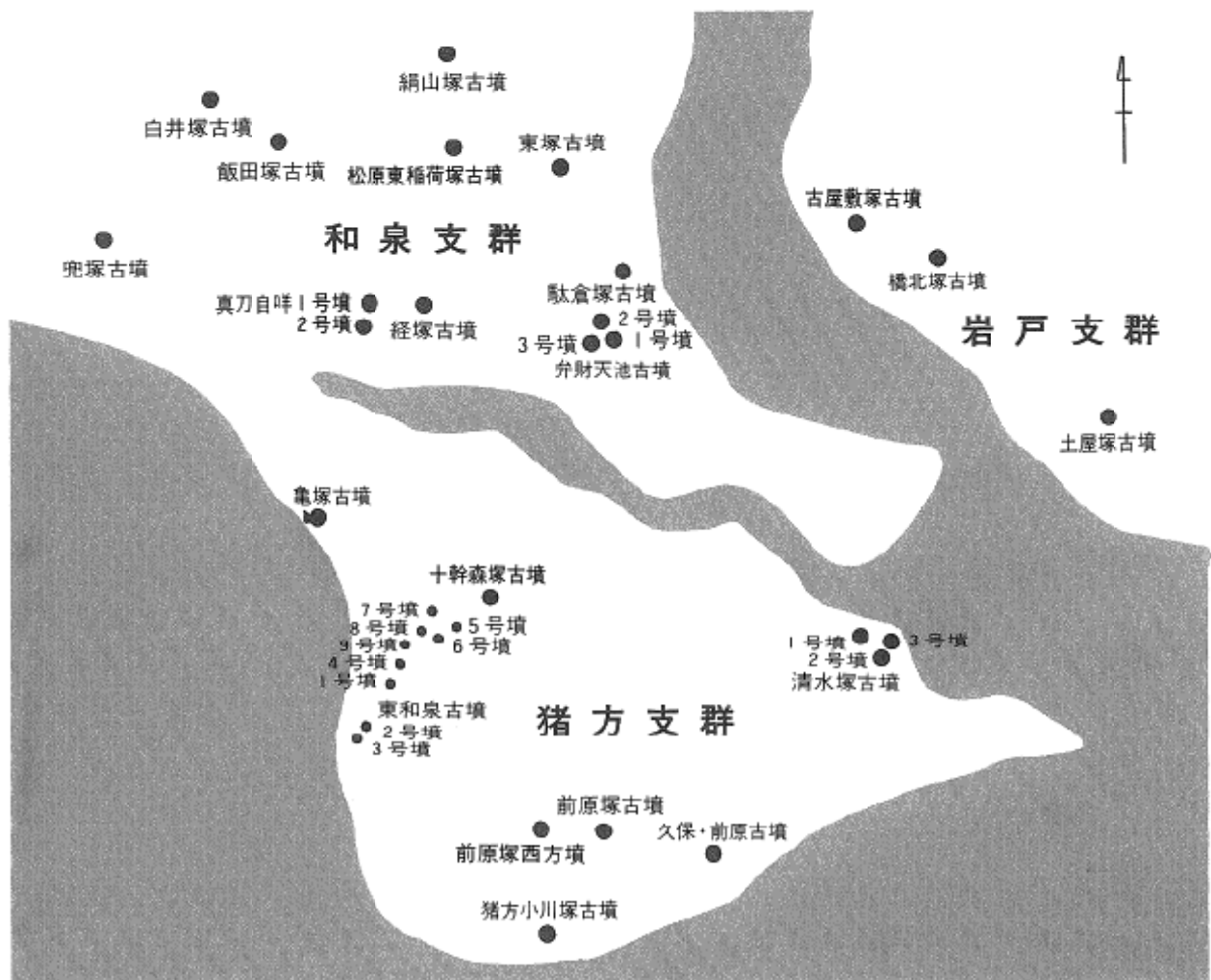
こうした調査によって、これまでわからなかった狛江古墳群のようすが、少しずつ明らかになり、いくつかの特徴的な点があることがわかってきました。

第1の特徴は、狛江古墳群が比較的短期間に集中的に造営された、いわゆる群集墳の形態をとることです。しかも一般的な群集墳が、6世紀末以降に造営されるのに対し、5世紀前半から6世紀中頃というかなり古い段階に造営されている、特殊なタイプの群集墳と考えられることです。

第2の特徴は、帆立貝形古墳である亀塚古墳以外は、そのほとんどが直径30～40mクラスの比較的大型の円墳と、直径10～20mクラスの小型の円墳によって構成され、明確な前方後円墳や前方後方墳をともしないことです。周辺地域の他の群集墳をみると、直径20m以下の円墳が主流で、直径25m以上の円墳が認められることはまれです（古墳群中に群集墳に先行する4～5世紀代の全長40～100mクラスの前方後円墳や前方後方墳が1～3基存在する例はあるが）。

第3の特徴は、古墳の数（総数70基前後と推定）が多く、その分布範囲（約1.5km四方）も広く、かなり大規模でありながら、群集墳としてはやや分散したかたちで分布していることです。現在確認されている古墳以外に、すでに消滅してしまった古墳が一定の密度で造営されていたことを考慮しても、古墳相互の間にはかなりの空間があったと思われます。そしてこの空間には、農地や集落が存在していたと考えられます。

これらの特徴を整理してみると、狛江古墳群は、周辺地域に先行して成立した群集墳で、分散型の初期群集墳とよばれる特殊なもので、比較的大型の円墳を中核として（一部帆立貝形古墳を含む）、短期間に多くの円墳が並行して造営された古墳群であるということができます。



狛江古墳群分布図